

## 八つの輝く瞳 重い障害をもつ児と漢字の出会い

柳楽 寛子

現在、私が担任している学級には四名の知恵遅れの子がいる。その四名のうち、二名は重複障害(ダウン症・脳性麻痺後遺症)である。

このような学級で、当校が取り組んでいる漢字教育についていけることなど考えなかった。我が学級のトップクラスの子だって、たどたどしい拾い読み、左手で文字を書く関係もあるのか、漢字を嫌い、自分の氏名もかな書きしている。

重複障害のある子は、まだ言葉もあまりなく、自分の名前も書けず、ひとり遊びの段階の子であるから、漢字の読みなんて到底駄目だろう。私は今まで通り、この子らの実態に即した学習を進めるのが、この子らが伸びてくれるだろうと思い、日々学習を進めていた。

ところが、『石井式漢字教育革命』(グリーンアロー出版社刊)その他、石井先生の書物を読むうち、この子らも漢字を読む可能性をもっているのではないかと。二～三歳児が覚えるのなら、あまりしゃべれず、ひらがなを知らないO君だって同じだろう。幸いお話を聞くことの好きな子らであるから、何げなく、漢字学習に誘い込んでみようと思いたっ

た。

## I 生活の中へ漢字を

### 一 教室内に漢字カードを

彼らが毎日手にして遊ぶ物体とか、よく目につく物体に、漢字カードを張りつけた。彼らには一にも二にも関心を持たせ、毎日繰り返しの反復が覚えるコツと思い、遊びながらにも目にふれるよう配慮した。マンネリ化させないように、時々カードの型を変えたり、マジックの文字色を変えたりすることも大切と思う。

現在張りつけている物は、机、黒板、椅子、鞆、戸、壁、戸棚、自転車、靴(上靴に布で)、筆入れ。計十カードである。

### 二 昔話を聞きながら漢字を

#### 第一回 創作話『太郎ちゃんのお手伝い』

平素のお話と違って、黒板に文字を書くので「オヤッ」という顔をしながらも、話をよく聞き、登場人物と共に「ハーイ」と大きな声で返事をしていた。

#### 第二回 昔話『桃太郎』

お話を始めると、「漢字も書いてよ」と三年I君が催促する。どの子もよく聞いていた。

### 第三回 昔話『金太郎』

絵本を見せながらお話をする。前回の学習に未練を残している子もいて四人全員の気持がぴたっとせず、O君はお話にのってこず、席を離れたりした。

お話を聞かせる時の雰囲気作りが大切であるし、子供らが興味を持つ話、話術を身につけねばならぬと痛感した。相手が、能力の低い子であればあるほど大切な事であると思う。

### 第四回 昔話『猿蟹合戦』

三年I君が、「先生、僕、漢字がいっぱい読めーやになったけん、また何かお話ししてごいて(ください)。漢字も書いておっせて(教えて)」と自分の方から言った。

一年K君も「ハヤおっせて、校長先生におっせてあげーと、エライ、エライとほめてござれーよ」と言う。

今日はカードの裏に絵、表に漢字を書いて話を始めた。提出漢字もあらかじめ用意したり、お話を聞く雰囲気ができれば成功と思う。

O君とI君……ちよっつつねって痛い痛いと言って“痛い”の文字を覚えさせた。

今ではお尻を押え、“痛い”の文字を指し、「痛い痛い」と言う。体で感じて覚えたことは長く忘れないだろう。

### 常掲黒板を利用して

空欄へ簡単な絵を入れる。二週間ぐらいで貼り変える。毎朝唱える。  
(次ページ参照)

### 漢字カードや昔話かるた遊び

子供たちは楽しんでかるた遊びをするが、すっかり暗記してしまい、一字一字読んでいない向きも見うけられるので、漢字カードで一字一字について、正しい認識をさせることが必要となってきた。

そこで大阪の田中登龍館から出版されている漢字カードを利用している。このカードはよく工夫されていて、利用が容易である。現在は、名詞一、名詞二を使っている。

### 反省の記

子供の視覚力のすばらしさには、唯驚くばかりである。自分の氏

名はおるか、余り言葉の言えない O 君が、大きな声で、ウサギ、サル、キンタロー、サラ、ユーセンと、指す漢字を誤りなく読むのを見て、今まで漢字指導というと押しつけて、興味、関心に関係なく覚えさせようとし、大切な芽をつんでしまっていたのではないかと、思い、そんな自分が恥ずかしくさえてきた。

四人の子供らは、自分が読める漢字の書いてあるノートを持ち、職員室へかけ込む。そして手あたり次第、先生方が忙しかろうがそんなことおかまいなく、自分のノートを広げ漢字を読み、褒めて貰い、大喜びしている。忙しくしておられる先生方には大変気の毒に思っているが、本人たちの喜びに免じてお許し願っている。

他学級の上級生が、「すごいなあ、僕負けた」と言うと、得意そうな顔をして、「先生、僕にもっとおっせて。おかさんの知らん字おっせて……」と張り切っている。

「栗」の文字を見て、以前に覚えた「栗鼠」を思い出したのか、一年児が「栗」をリスと言った。まだ文字を余り知らないこの子らに与える文字については、今少し教師の方で考えて提出せねばならないのだろうか。

日常多く使用する文字を提出するのが良いのだろうか。

三年 I 君が読んでいた本に狼の文字を見て「せんせ、この字のこ

っち側(扁のこと)は猿のこっち側(扁のこと)と同じだね。こら仲間かね」と言った。

私はすかさず「えらいぞ。僕はすばらしい漢字先生だ。この字はオオカミという字だよ。サルもオオカミも同じ獣の仲間だよ。また見つけたら、先生にもおっせてよ」と話した。

この子は左ききで、とても不器用であり、漢字を書くのがとても苦手、三年生で入組してきた時は、自分の氏名も漢字で書けない子であったのに、こんなに漢字に興味を持ち、たどたどしい読みから、スラスラ読みへ変身してきた(まだひらがなの多い文章を読むのは、たどたどしい)。

文字が読めるばかりでなく、最近はとみに張り切って、自信がついてきたようである。

脳性麻痺後遺症の I 君は、現在ひらがなを大体全部覚え、書ける漢字も「井上きよ司、いけ田、川上せん生、目、口、土よう」十文字ある。

ダウン症の O 君は、自分の名前は勿論全然書く事も読むこともできないのだが、漢字は I 君より早く覚えた。

漢字はかなよりやさしかった。